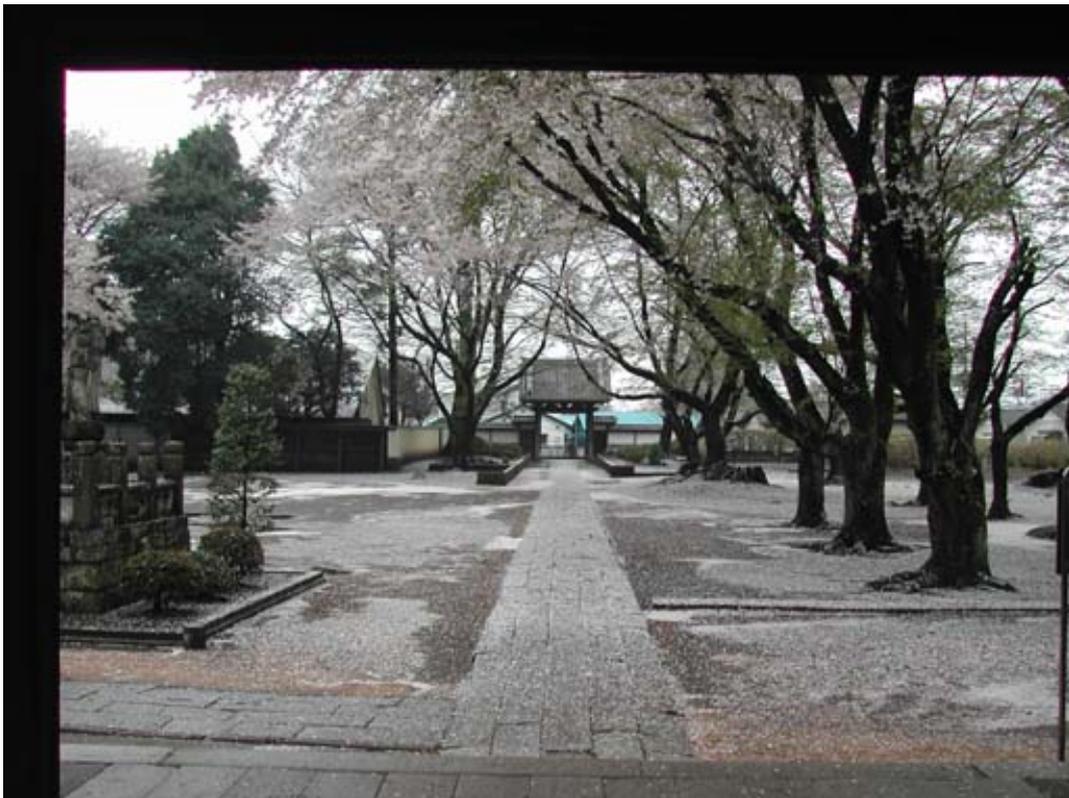


寿亀山弘経寺 茨城県**結城市**大字結城 1591

安土桃山時代に結城家 18 代目当主秀康が、娘の松姫の菩提を弔うために建立したと伝えられる御朱印寺。浄土宗関東十八檀林(宗派の学問所)の一つとしても知られる。寛保 2 年(1742)、江戸時代の結城の文化に多大な影響を与えた俳人砂岡雁宕(いさおかがんとう)を頼って結城を訪れた与謝蕪村は、その後、弘経寺に身を寄せ、墨梅図や楼閣図などのすぐれた襖絵を残した。桜並木のある緑豊かな境内には雁宕の墓や蕪村の句碑がある。境内の西側には、御朱印掘が残る。



「春雨に 花卉舞いちる みずたまり kumaken」弘経寺山門から正門までの境内、本尊、阿弥陀如来立像

寿亀山弘経寺は、浄土宗の名刹で安土桃山時代の文禄 4 年(1595)結城家十八代の城主秀康(徳川家康の子)がその息女松姫の追善供養のため飯沼の弘経寺の住職檀誉上人を招いて建立したと伝えられ、浄土宗の学問所関東十八檀林の一つに飯沼弘経寺と共に数えられてる。境内には三つの山門があり本堂に一番近い門を撮影した。この門の左側に朱塗りの堂があり「栴檀林(せんだんりん)」と書かれていた。向かい側には鐘楼があり墓地と本堂や家屋を含めて密集した空間である。他にも江戸時代の俳人、与謝蕪村が滞在中に画いた襖絵や室町時代作「当麻曼陀羅」があり茨城県文化財に指定されています。結城には寺が多くこの周りに五寺もあねる。「肌寒し 己が毛を噛む 木葉経」蕪村の歌碑より。

茨城県取手市の大鹿山清浄院弘経寺。

飯沼(水海道)、結城の各弘経寺とともに「関東の三弘経寺」と呼ばれている。

開山は浄土宗を中興した第七祖聖岡(しょうげい)の弟子、良肇(りょうじょう)が
応永 21 年(1414)、飯沼の弘経寺の分寺として、当初人家もない山中に草庵を設けたのが
始まりという。一時は無住の時代があったという。

天正 18 年(1590)徳川家康が当地に遊猟の際、案内をした住職の宣誉上人が有徳の僧で
あったため、特に境内外三十一石の御朱印を授かり、以来御朱印寺としての格式を備え
、堂宇の規模も拡大された。現在も家康をはじめとする十一代の御朱印が保存されて
おり、たいへん貴重である。

昭和 22 年火災によって古くからの伽藍(がらん)を失ったのは惜しまれるが、
100 メートル余の長い表参道や、広々とした境内が昔をしのばせる。

本堂は昭和 47 年の再建、本尊は阿弥陀如来像(鎌倉時代後期)

境内山門の脇に、白山大権現の祠があるが、「白山」という地名や「白山通り」
今では少々寂しくなってしまった「白山商店街」の名の由来である祠である。

かつては白山商店街の中程に白山神社として祀られて居り、金刀比羅神社と共に
人気が高く多くの参拝者を招いて賑わっていました。



新四国相馬霊場 88ヶ所の札所があります。

室町時代、大鹿左衛門之丈綾部時平は大鹿城を築き開城しました。

永禄四年(1561)雁金山の合戦が小文間城主である一色宮内良政により急襲され

ました、この時の城主の大鹿太郎左衛門の奥方は弘経寺の息女であったという、合戦時には当寺へ逃れ、稲城主の高井十郎直徳へ援護を求めたと伝わる。大鹿城主(現取手競輪場)は敗れましたが、高井十郎直徳らによって受け継がれました。大鹿の砦「とりで」は、後に「鳥手」「取出」「取手」と地名として記録に残りました。

下総国の、もう一つの弘経寺

関東三弘経寺である大鹿と飯沼と結城ですが。下総国にはもう一つ関宿にもありました、しかし家康の命により天機山傳通院光岳寺と改名して葵紋を守っています。

開基は徳川家康の異父弟 松平康元が天正 18 年(1590)初代関宿城主になられた時に、母君(於大の方-おだいのかた-、家康と康元の生母)の孝養と子孫繁栄等を祈り建立された。正一位 於大の方(傳通院殿蓉誉光岳智香大禅定尼)は慶長 7 年(1602)8 月 29 日に逝去されています。

開山は、関東十八檀林の一つである水海道 飯沼 弘経寺より導蓮社玄誉上人善慶天機大和尚を迎えて「弘経寺」と称していましたが、家康公の命により飯沼・結城・大鹿・関宿と周辺に四つも同じ名前(弘経寺)を持つお寺があるのはまぎらわしいので、於大の方の戒名をとり「光岳寺」と改めるようにいわれ、以後康元は「光岳寺」と改めて於大の方菩提所と決めました。於大の方の御遺骨は東京小石川の傳通院に葬られており、家康公により菩提寺と定められました。

当山には於大の方のために建立した御守仏地藏尊と御齒骨、御位牌等が康元により奉納されています。現在、御守仏地藏尊は延命子育て地藏尊として信仰されています。

他に、家康公の御位牌・関宿藩士で勤王の志士である「杉山対軒」の顯彰碑と対軒直筆の額及び第 7 代関宿城主であった牧野信成が、父である康成のために建立した供養塔が残っています。

関東三(四)弘経寺である大鹿、結城、関宿は飯沼弘経寺の分寺という結論になるようです。

大鹿(取手)と結城と関宿の弘経寺は、飯沼(水海道)弘経寺の分寺。

「弘経寺」は徳川家康により、御朱印寺として三つ葉葵が示す通り国家の保護を得た寺院であります、関宿の弘経寺のような改名された寺もありましたが「弘経寺」の寺名を家康から受けていたからこそ、後世まで御朱印寺として格式ある弘経寺として歴史の舞台を飾ったのではないのでしょうか。徳川家康(1542~1616)

大鹿山弘経寺と飯沼や結城や関宿の弘経寺との相違。

大鹿(取手)と飯沼(水海道)弘経寺の開山は、良肇(りょうじょう)であり、応永21年(1414)で同じ年であります。

関宿の弘経寺は、天正18年(1590)であり、結城の弘経寺は、文禄4年(1595)であります

弘経寺は、徳川家康の生存の頃に御朱印寺となりました。

寛永九年(1632)正月、大鹿弘経寺十世照誉(しょうよ)了学上人は、江戸芝の増上寺の17世貫首に任じられました、二代将軍秀忠が亡くなり、増上寺に於いて営まれた公葬の大指導(おどうし、法会の時の最高の地位で儀式を行う僧)を勤められたそうです。

従って、大鹿山弘経寺は、増上寺の別院になる訳です。

更に、寛文年間(1661~1672)には、徳川家綱より等身大の六地藏の建立を受けております、現在も参道に鎮座しています。

大鹿の弘経寺の歴史は、「家康の遊獵の際に宣誉上人の人格に家康が惚れて」とあり飯沼の弘経寺は、「孫の千姫(天樹院)が生前からの望みによる」とあります。

この事実の背景を整理しますと下記のようにいえます。

- 一、千姫は、生存時には度々、飯沼に訪れていたようで当寺がお気に召されていたご様子であり、家康はそのような千姫をたいそう可愛がって居られました。飯沼には、千姫の廟や手鏡などが残り、更には徳川家寄贈の今は無き鐘があった鐘楼が残っています。鐘は旧日本軍のために供出されました。
- 二、草庵した良肇の弘経寺は、浄土宗関東十八檀林の一寺として後世には、結城や関宿の弘経寺へ広めています、だが大鹿は檀林寺ではありません。
(飯沼弘経寺の「関東十八檀林所在地」を参照下さい)
芝の増上寺の別院ということであれば、なんとなく理解する位でしょうか。
- 三、飯沼は当然として、結城も関宿も徳川家という身内に関わる歴史で葵の家紋を受け継いだのですが、大鹿と家康の関わりは、家康の個人的な交友関係である。

このように、大鹿の弘経寺は他の弘経寺とは、少し違った事情により葵の家紋を受け継いできたようです。

「分寺」とは、一寺としての寺名が複数となった場合に、主名の寺に対して分け寺というようで、末寺ではありません。

2006年四月雨日、コピーによる転載を禁止します、

2006年6月 追記 kumaken